

石見銀山遺跡総合整備計画策定関連

石見銀山  
関連遺跡分布資料調査報告

## はじめに

本書は、島根県教育委員会が昭和五十九年度に実施した「石見銀山関係資料調査」同六十年度に実施した「石見銀山関連遺跡分布調査」の両報告書の一部を転載したものです。本協会は、昭和五十八年度から四ヶ年計画で島根県教育委員会より委託を受けて「石見銀山遺跡総合整備計画策定事業」に取り組んできましたが、これら調査は計画策定と密接に関わり合うものとして実施されました。調査ではこれまでの銀山史研究にはなかつた新しい知見も加わり、いま石見銀山は新たに見直されつつあります。本書は、この二つの調査成果を広く知つていただくために、その概要を一冊にまとめたものであり、島根県教育委員会の了解を得て、ここに刊行するものです。本書が「石見銀山」を理解する一助になれば幸です。

昭和六十一年三月

目

次

石見銀山関係資料調査報告

- |             |       |   |
|-------------|-------|---|
| 1. 石見銀山について | ..... | 1 |
| 2. 古文書調査    | ..... | 2 |
| 3. 用具の調査    | ..... | 5 |
| 4. 美術工芸品の調査 | ..... | 6 |

石見銀山関連遺跡分布調査報告

- |                  |       |    |
|------------------|-------|----|
| 1. 調査に至る経緯と調査の概要 | ..... | 10 |
| 2. 各遺跡の概要        | ..... | 11 |
| 3. 石見銀山の在銘石塔について | ..... | 20 |

# 石見銀山関係資料調査報告

## 1. 石見銀山について

石見銀山（大森銀山）は日本で銀の産出が急速に進んだ十六世紀において最初に開発された銀山であり、銀精錬の新技術を導入し専門の鉱山業者を出現させるなど、江戸時代初期に最盛期を迎えた日本の貴金属鉱山の先駆的役割を果たした銀山である。石見銀山の開発は伝説上は鎌倉時代にまでさかのぼるが、ほぼ確実には大永六年（一五二六）のことである。この年博多の貿易商人神谷寿祐が大森にいたって自然銀塊を発見し、銅鉱の取引きのあった出雲宍浦の網山師三島清左衛門に開発の協力を求め、本格的な開発が始まった。

そのころ、この地域は戦国大名大内氏（義興）の支配するところであり、同じ大内氏の支配する博多の商人が銀山の開発を行なったのは偶然ではなく、銀山の開発が戦国大名大内氏

の幕臣強兵策の一環であったことを思わせる。大内氏は十四世紀末より朝鮮と交渉を持ち、十五世紀なかばから対朝貿易が増大するとともに對明貿易もほとんど独占的に行なうにいたった。こうした事情が背景となつて、中國・朝鮮で行なわれていた銀の灰吹法がいちばん確実には大永六年（一五二六）のことである。この年博多の貿易商人神谷寿祐が大森にいたって自然銀塊を発見し、銅鉱の取引きのあった出雲宍浦の網山師三島清左衛門に開発の協力を求め、本格的な開発が始まった。

そのころ、この地域は戦国大名大内氏（義興）の支配するところであり、同じ大内氏の支配する博多の商人が銀山の開発を行なったのは偶然ではなく、銀山の開発が戦国大名大内氏

（一六〇一）大久保石見守長安が奉行となつて下向し、大森に陣屋（のちに代官所）を構えて銀山の經營と幕領の支配にあつた。長安は甲州に生まれて武田信玄に仕え、のち徳川家康に認められ、銀山の開發に功績のある人物で、石見銀山の奉行について慶長八年には佐渡銀山奉行、同十一年には伊豆銀山奉行を兼ねている。彼は従来の甲州探鉱法とボルトガル宣教師が伝えた兩流域鉱業法とを活用した大規模採鉱法を採用して鉱山技術に新機軸を開いた。そのためそれまで年間数百貫に過ぎなかつた石見銀山の銀産出高は、

たちまち年間三、六〇〇貫の運上を出すにいたつた。近世銀山は幕府直営を原則としたが、產出量の少ない山は個人經營にまかされることが多かつた。幕府直営の山を御直山といい、山師個人が所持・經營する山を自分山と呼んだが、石見銀山では効率のよい山も含めて自分山が多かつた。上納された運上銀は月づき

代官所の御銀蔵へ納められ、一ヵ年分をまとめて十月下旬に荷造りし、陸路赤名峠を越えて三次から尾道へ出、それより海路大坂の御銀蔵へ運ばれるのが通例であった。銀山坑内

の留木や精錬の燃料として多量の木材と薪炭が必要であり、そのため幕府は銀山周辺に直営の御林を確保したほか、邇摩・邑智・安濃三郡の中に銀山周囲三十二カ所を設け、そのうち六カ村を特に炭方六カ村として指定していた。

慶長年間を最盛期とした石見銀山の盛況は、寛永期（一六三〇年ごろ）を境に急速に衰退し、幾度かの再起の試みのかいもなく、往時の繁栄を取り戻すことはできなかつた。全盛期に数万を数えたと推定される人口も、延宝四年にはすでに家数三一七軒、人口一、五六四人に激減しており、以後人口は停滞した。産銅高も大幅に減り、元禄期にすでに年間平均三〇〇～四〇〇貫程度、幕末天保期以降は年間一〇〇貫に満たなくなってしまった。

近代になって大阪藤田組が經營にのりだし、ベルトン式水車を使用し、やがて電力を利用するなどして極力開発に努め、銀に代わって相当量の銅を産出したが、大正二年（一九一二）

には休山してしまった。残された坑口跡・代官所跡・墓地・城跡などを中心に、昭和四十四年（一八六九）「石見銀山遺跡」として国指

定の史跡となり、現在文化財としての価値を高めつつある。

（松尾 寿）

## 2. 古文書調査

石見銀山についてのこれまでの研究には、山根俊久「石見銀山に関する研究」（一九三一年）、小糸田淳「石見銀山の研究—前期における—」（「史林」、一九三三年）、同「日本鉱山史の研究」（一九六八年）をはじめとして、川崎茂・江面龍雄・内藤正中・村上直らの研究があり、その概要ははあきらかとなつてゐるが、残された問題がないわけではない。

今回石見銀山をトータルに把握するための試験として調査対象を銀山周辺にも広げ、地方文書の遺存状況の調査を行なつた。調査地は仁摩町である。以下に調査先の概要を記す。

### （1）大田市大森町および

#### 大田市内の文書

大森は江戸幕府奉行の陣屋（延宝三年より代官所）がおかれた所で、銀山の外郭町とし

て發展した。代官所の表門、門長屋、山吹城跡、初代奉行大久保石見守の墓碑、山筋安原伝兵衛の墓、二代目奉行竹村丹後守をはじめとする奉行、代官の墓、地役人の遺宅、代官所同心の屋敷、多くの間歩（坑口）、江戸時代以来の寺社などを今に残し、往時のおもかげをしのばせている。

高橋家はもと銀山附同心の家で、一部の文書については村上直・田中圭一・江面龍雄共編「江戸幕府石見銀山史料」（一九七八年）に収録されている。幕末の「御用留」「歩銀勘定帳」がまとまつたものとして注目され、ことに前者は江戸時代後期の大森近辺の日常の様子を知る上で貴重な史料である。

山中家ももと銀山附同心の家で、大坂の陣に動員した銀細人などのことを報じた奉行竹村丹後守の書状、同藤兵衛の書状などは貴重なものである。まとまつたものとしては銀山附

同心各家の江戸時代後期の「由起書」「義類書」、近代になって旧同心たちが士族への復族諸願を行なった一連の草儀文書などがある。

清水寺は博多商人神谷寿徳がこの寺に参拝

して銀鉢を免見したとの伝説のある寺である。銀峯山と号し、大森代官の崇敬を代々受けて寺勢大いにふるい、数かずの寺宝がある。そのうちでも「辻ヶ花榮丁字文造觀」は山師安原伝兵衛が慶長八年（一六〇三）伏見城において徳川家康から拜領したもので、国指定の重要文化財である。古文書としては墨末安政年間の清水寺再建修復に関する史料がほとんどである。

大田市久手町の長野家も銀山附同心の家で初代奉行大久保石見守をはじめ歴代奉行・代官の書状を残し、貴重なものが多い。

なお、大田市内に残されていた史料としては、木目録のはかに島根大学附属図書館に所蔵されている林家（旧五十嵐村）、熊谷家（旧大森町）、坂根家（旧忍辱村）各家の古文書もまとまつたものであり、あわせて見る必要がある（島根大学附属図書館「石見国銀山領地方文書目録」一九八一年）。また、もと銀山附同心の家である野沢家も貴重な史料を多く

く保存していることが知られているが今回調査できなかつた。

（松尾 寿）

いたらしく、その關係の文書も含まれている。また山中家文書と同様、藤井家の「山緒書」「義類書」がまとまっている。

## （2）邑智町内の文書

石見銀山の東南部に位置し、東西に江の川が貫流し、交通の要衝である。いわゆる銀山町村三十二カ村のうちの多くを含み、炭方六カ村は忍辱村を除けばすべて現邑智町に属している。運上銀の運送経路にもあたり、銀山とは深いつながりのあつた地域である。

築瀬の松浦家はもと奥山村に住んでいたので奥山村關係の史料を伝えていた。大森代官

山詮塙岡が貢重である。「御教金」「貨附銀」に関する史料は幕末の銀山領農村の様子をうかがわせる。

吉郷の安田家には、近代になつて大森から吾郷へ移住したものと銀山附同心藤井家の子孫が養子に入り、そのため藤井家文書を伝えている。木目録では本米安田家に伝わった吉郷村に関連すると思われる文書は除き、銀山に

泉津は、古代では温泉郷などの名勝の地たから、早くから温泉が湧いていた名勝の地であった。元暦元年（一一八四）、益田兼高が石見国の押領使に任せられたが、その兼高の所領に温泉郷がみられる。以来、益田氏やその支族が支配し、やがて大内氏が進出し、大森銀山の開発に伴なつて、外港として温泉津港や垂ヶ谷銅山の管理にもかかわって

## （3）温泉津町内の文書

中・近世に大森銀山の外港として栄えた温泉津は、古代では温泉郷などの名勝の地

津が繁榮していった。大内・小笠原・尼子・

毛利と入れかわったが、天正八年（一五八〇）秀吉は毛利を攻めた。同十五年、秀吉は九州島津征伐に出陣したが、秀吉を陣中に見舞った鶴川幽斎は、その途次、温泉津宝塔院惠院寺に立ち寄り、「百種連歌」を興行したこと

が、「道の記」に見えている。

近世に入り、銀山は幕府の直轄領となつたが、慶長六年（一六〇一）銀山奉行の大久保安長が温泉津に地鐵を免除し、家を普請し心

安く居住せよ、といつて港町の隆盛を助成した。また銀山領各村は御料所村として銀山経営に必要な年貢や資材を供給したりした。温泉津は産出銀の搬出港として、慶長・寛永年間に運び出されたが、船頭・木材・竹材・陶器などを積み出した。江戸中期以降では登米を積む千石船などがよく寄港した。「斐米寄港絵図」を見ると、この港は、東方の昌根町加賀港・大社町鷲浦港と宇都港の次にある天然の良港であり、西にある次の港の浜田港との中間があった。温泉津には古い温泉宿・古社・古剣もあり、銀の産出量が減少しても、江戸末期の文久二年・元治元年には新しい温泉が湧出したりして、鉄道が開通するまでは販わった港であった。

つぎに古文書調査の概況についてみると、

今回、温泉津町では四ヵ所を調査した。元庄屋の多田家では八十六点中、銀山関係文書として七十九点を遺した。以下、同様にして元

村役人の重田家では二十数点中二十三点を、元庄屋の内藤家では二十七点中十点を、元回船問屋の山本家では一三六点中四点を、それぞれ選び出し、合せて一二六点をカードに収録した。

多田家文書は舟関係の文書が中心で「温泉津舟表御役」について、寛永年間の年月毎に算用事を記録し、勘定所に提出している文書が多い。ついで馬札役・舟役のこと、さらに船場役・水上役の役職を歴任した文書が多い。

注目されるものには、慶長十年（一六〇五）の木製の高札と、地鐵免除の文書を写した文書が三通、附属文書七通があることである。高札は文化財として貴重なものである。その他、諸國の回船や客船の往来文書がある。

又、同書によると、近世初頭の銀山最盛期

には、「銀山近き津々浦々四方の大船號ひ繁ぎ、五艘の類は謂ふに及ばず、和漢の珍器重宝に至るまで多く集り来る事、恐らく今日本之内、此銀山に居るまじと申し伝へたり」とあり、近き津々浦々の中に、当町内の馬路、仁万・宅野の諸湖が含まれ、ここで陸上げさせられた諸物資が銀山町へ運送されたものと考えられる。

と、寛永十五年（一六三八）には銀山が衰弱し、馬札役が以前のように上納できないと訴えた文書が注目される。また内藤家では湯

飯・御料所村のこと、山本家では御役銀質帳・舟の往来文書等がある。（鳥田 成矩）

#### (4) 仁摩可内の文書

当町は仁万・宅野・大國・馬路・天河内五ヶ村の近世村落から成り立っている。近世には石見銀山領（天朝）であった。

銀山曰記によれば、十六世紀の初めごろ、博多商人神谷秀信が銀山の本格的開発につとめ、銀山は大いに繁榮し、馬路村の古御や新ヶ岩補は、銀の礫（鉱石）を販売した船が頻繁に積出し港として駆けたといふ。

又、同書によると、近世初頭の銀山最盛期には、「銀山近き津々浦々四方の大船號ひ繁ぎ、五艘の類は謂ふに及ばず、和漢の珍器重宝に至るまで多く集り来る事、恐らく今日本之内、此銀山に居るまじと申し伝へたり」とあり、近き津々浦々の中に、当町内の馬路、仁万・宅野の諸湖が含まれ、ここで陸上げさせられた諸物資が銀山町へ運送されたものと考えられる。

一方、町内の旧大国民村は、銀山御園村の一  
に指定され、坑木など銀鉱採掘に必要な諸材  
木を供給する場所であった。

以上の諸点を想定すれば、当町内には鐵の  
積出し、諸物資の荷上げ、運送、或いは御園  
村に関する資料が遺っているはずである。  
しかし、調査の途中ではあるが、宅野の藤

問屋二郎家においては、多数の資料が所蔵さ  
れているけれども、御用留・年賃割付など銀  
山と関係のないものがほとんどであった。又  
天河内の溝行寺は、祇園時代の小笠原氏関係  
文書と真宗関係文書を藏しているが、銀山に  
かかわるものは全くなかった。(藤岡 大拙)

此度の調査にあたってはその区分を「民具」  
と定められたが、実際には極めて短時間の調  
査であつたためより多くの関係民具調査にあ  
たることができなかつた。また多くの方々も  
述べていらざるとおり、閉山以来既に百年に  
近い空白もあり、そのためより多くの民具資  
料が散逸あるいは消滅してしまつてること  
もあって、そのためにも調査整理の範囲を極  
度に縮少せざるをえなくなつた。

第一段階としては、現在銀山資料館に保存  
展示されている資料の調査をしてがけ、主に写  
真、民具図記録・計尺・使用目的等の記載整  
理を実施した。

第二段階としては、銀山周辺の民家を対象

として、仁万町(特に大国民地区)、それに大  
田市(大森・大東地区)・邑智町と合わせて  
約七、八家の民家を訪ね、各家に残る資料の  
調査にあたつた。

第一段階での調査では約八十点、第二段階  
では約三十点ばかりの記録をしたが、これら  
の内容は主として、①鉱道内の安全管理具、  
②鉱内探掘諸用具、③選鉱・製錬に用いる用  
具等であった。従つて所謂銀山労働者の日常  
生活用具といった資料にまで及んでいない。

さて当面これらの調査をおして感じてい  
ることは概略次のとおりである。

現在に残っている用具の多くが鉄製品・陶  
土石製品で、中には木製の用具も見られるが

同じ木製品でも荒仕事に用いた用具となると  
數も極めて少いのを感じる。一般民家で発見  
される用具の多くは、軒用具としているのが  
特徴であり、例えば採掘用・製錬用の類が製  
成用あるいは土工用具になっているなどで  
ある。けれどもこれら軒用具も昭和三十年代  
までを限度として消滅をたどつたものが多い。  
民具の材料が繩・簾・布・紙類では、多くが  
より早く廃棄されている。また時にこの類に  
出合つことがある。その多くは明治末以  
降に製作されたものが多い。一見古めかしい  
類付きをし、過去と寸分違わない形式と思わ  
れることはあっても、この明治・大正の頃に  
前代の銀山を引き続いだ永久鉱山関係の用具  
として用いられたものが多い。けれどもこう  
した中にあって、時折かつて明治前期の頃ま  
で続いた銀山で用いた用具が見いだされるこ  
ともあり、そうした銀山関係の民家などの資  
料はまことに貴重なものと言える。

さて、今後における資料整備に思うことは、  
幕末から明治、そして大正に用いられた民具  
の中には、かつて盛期を語る銀山の絵巻物な  
どに照らす時、その形式等においては差異が  
少くむしろ同類同質のものであるとさえ感じ

られる程である。このことは單に銀山民具に限らず他の民具形式の伝承性に照らしても考えられることもある。しかもこの同類性が大正を更に下り昭和年代の極近年に至っても、極めて近似な形が見られるとして、例えば炭焼・石工用具などにおいてなどである。

このような実態を踏まえる時、今後の収集調査にあたっては、今述べた絵図等に加えて文書記録等にたよることも必要になり、同時に近年まで使用し続けた伝用具の実状にも注視しなければなるまい。

幸いこの春佐渡の相川を訪ねる機会があたえられたが、かねてから予想していた通り、銀山探掘に関する諸用具がそのまま当金山においても用いられてきていたことである。これは佐渡に残る金山探掘にかかる民具であるが、更にこの地に残る文書の中にも多くの参考資料が散見されることで、例えば、「金銀山稼穀取扱一件」(佐渡相川志所載)などは当金山採掘用具を知ると同時に石見銀山採掘用具を知る上にも極めて貴重なものと言える。

(1) 旧石見銀山領の美術工芸品について  
旧石見銀山領内の美術工芸の調査は、大森町内を中心近くの数箇所に限られた、といふよりも、すでに明治維新の激動期に格式ある武家や豪商も教科をのこしてこの地から離散し、その追跡調査は困難を極め、また社寺の調査においては、その藏品台帳に掲載の奉行や代官あるいは豪商の奉納美術工芸品目が多くが世代の交替や時の推移によって、いつしか散逸の厳しい現実を知らされることがこのように今後の収集調査にあたっては、過去における文書・絵図等の資料をはじめ、近

年にまで伝わる民具の伝承性をも踏まえる立場が必要であり、同時に周辺の關係民衆を地道に訪ね調査収集にあたることが肝要と思える。殊に此度の段階ではその域には迷なかつたが、一般民衆の年中行事・芸能・民俗信仰等についても、これらの調査に加えて充実を加えなければならない。このことはとりもなおさず今行っている民具収集調査

#### 4. 美術工芸品の調査

をより明確にするものであり、資料をより高い価値に導くことにもなるはずである。

この度の調査では仁摩町教委の方々には格別協力を賜わった。また佐渡においては、この学の泰斗田中圭一氏に調査の配慮と指導をいただいた。同行した大田市教委大田国氏と共に謝意を表したい。(勝部 正邦)

始めたのは毛利氏から石見銀山が徳川家康の手に移り、天領となるに及んで中央の文化が、この地に導入されたことは容易に考えられ、初代奉行の大久保石見守以来歴代の奉行・代官に負うところが多く、わけて二代奉行竹村丹後の時代が注目される。丹後の慶長十八年(一六一三)と寛永十二年(一六三五)にわたる、その治政二十二年間には慶長十九年(一六一四)に石見國一円の總檢地(吉の検地)を行い、また銀の産山も多く、その功績はすこぶる大きいが、また丹後の文化人としてその周辺には、從弟に安楽庵策伝(天文二十二年(一五六四)と寛永十九年(一六四二)

がある。重伝は京都鬱離寺竹林院の開山で、当時の京都でも、文化的教養の高い僧侶で、また古田織部に茶を学んだ高名な茶人でもあり、その所有する名物製は、安樂庵製と称され、現在でも評価は高い。このころ、茶の湯は一流文化人のサロンであったが、重伝は小堀遠州や松花堂昭乗らとも交友のある著名人であり、丹後もこれらに加わるほどの教養人であったと考えられる。丹後の最後の遺書によれば、秘蔵の春屋禪師の墨跡を身寄に片身分けしたことが記されている。この春屋の墨跡を所有することは釋迦にも優れ、かつ茶の湯にも造詣の深い教養人であったことを意味するものである。こうした一連の古文書から当時の天領の中心地として殷賑を極めた大森には、幾多の優れた美術工芸品が存在したと推察せられるのであるが江戸時代中期以降、銀の産出が激減するにしたがって、天領はその力を弱め、さらにこれが決定的になるのは幕末体制の崩壊にともない、それまでの栄光が全て過去のものとなり、さらに明治に入つて大森町内再度の火災は伝来の美術工芸品の消滅と散逸を招くに至る。いまこの地に遺る指定文化財は往時の盛況の一端を偲ばすもの

である。(以下(●)は重要文化財、(◎)は島根県指定文化財、(○)は大田市指定文化財である。)  
まずあげられるのは、清水寺である。この寺は銀峰山と号し真言宗の古刹で大義代官歴代の尊崇をうけた。そこに伝えられる、「辻が花染丁字文道服(重文)」一領は銀山の山師安原伝兵衛(備中)が、伏見城で家康から慶長八年に打拂したもので室町時代・江戸初期に編られた「辻が花染」の室内着で日本染織史上有数の逸品である。

思えば私がこの道服を初見の動機は、昭和四十一年秋であった。他の寺宝を拜見の末に御住職がこんなものもありますと土蔵から持ち出され、さらにもときどき村祭で着て舞つたもので附言されたときの驚愕を思い起す。辻が花染は現在一年(三センチ四方)花瓶で江戸初期在路の稀品である。「綱口(見)」銘文から永禄六年(一五六三)小輪狩野重信筆の繁華図を描いた泰納松馬で在籍品として珍らしい。「備前焼花瓶(県)一隻」は元和二年に備前の医師木村道志の奉納した花瓶で江戸初期在路の稀品である。「綱口(見)」銘文から永禄六年(一五六三)小輪狩野重信筆の繁華図を描いた泰納松馬で在籍品として珍らしい。「備前焼花瓶(県)一隻」は元和二年に備前の医師木村道志の奉納した花瓶で江戸初期在路の稀品である。「綱口(見)」銘文から永禄六年(一五六三)小輪狩野重信筆の繁華図を描いた泰納松馬で在籍品として珍らしい。「備前焼花瓶(県)一隻」は元和二年に備前の医師木村道志の奉納した花瓶で江戸初期在路の稀品である。「綱口(見)」銘文から永禄六年(一五六三)小輪狩野重信筆の繁華図を描いた泰納松馬で在籍品として珍らしい。「備前焼花瓶(県)一隻」は元和二年に備前の医師木村道志の奉納した花瓶で江戸初期在路の稀品である。「綱口(見)」銘文から永禄六年(一五六三)小輪狩野重信筆の繁華図を描いた泰納松馬で在籍品として珍らしい。「備前焼花瓶(県)一隻」は元和二年に備前の医師木村道志の奉納した花瓶で江戸初期在路の稀品である。

さて現在は京都国立博物館に寄託保存されている。なお、本品は美術的価値とは別に石見

銀山の盛時を物語る重要な資料でかつて、州兵合に銀を山と積みあげ、家康の御前に供し、た銀山奉行大久保石見守と山師安原伝兵衛に對し家康は自ら着用のこの道服を伝兵衛に与え、さらに備中の称号も授けたと銀山物語は緩る。家康が國家統一のため、いかに石見銀山の銀の座出に執心であったかが推考されるものである。

王像（京）一軸」「絹本着色不動明王像（京）一軸」ともに大日如来の侍者として仏法を守護する不動明王を描く南北朝の仏画。「絹本着色愛染明王像（市）」は室町期の真言密教時代の作。「絹本着色三宝荒神像（市）」は室町時代の作。「絹本着色安原備中像（市）」は備中天正の頃石見銀山に入り、觀音のお告げにより新らしく坑道の開発を行ひ、一躍銀の産出量を増加した功績により、前述の道服と後述の顔面を抒歌し、名の傳中を賜わる。この備中の寺保院は安政六年（一八五九）に辛酉西暦が描いたものである。「紙本着色忍（市）一軸」金地極彩色の竹脇扇面で、慶長八年八月一日に大久保石見守とともに、伏見で東京から拜領したもの。扇表には仙人と唐子の絵を、裏面は雲間に日月を描く。無落款ながら狩野派の両家の作で格調が高い。城上神社は、大物主命を祀る延喜式の社と伝えられ、永享六年（一四三四）に内大臣が邇摩郡馬路高山から大森町の愛宕山に遷座し、天正五年（一五七七）に、毛利氏により現在地に移される。寛政十二年（一八〇〇）建立の「拂殿（幕）」は重層入母屋造りで精緻らしい。こ

の拂殿の「繪天井（市）」は中央に繪彩色で龍を描き、その周りを建立のときに開拓した銀山役人や大森町役人の家紋を描く。筆者は幌円彌守休である。「能面、付能面箱（市）三面」銀山奉行初代の大久保石見守の奉納と伝えられるもので白式刷、墨式刷、増女の三面と黒漆塗に、下り藤枝、時松を散らした箱を附す。大久保石見守は熊楽師の出身と伝えられ、またこの地でも能が舞われた可能性も考えられる。

「熨斗目（市）一領」銀山領三十一代の代官川崎平右衛門定孝が明和三年に将軍徳川家治から拜領の時服で、その孫の川崎平右衛門が天明七年（一七八七）が奉納したものである。井戸神社は明治十二年（一八七九）享保十六年（一七三一）着任し、大凱旋に領民を教つた十九代代官井戸平左衛門を祀った社である。「刀銘清則（京）一口」室町時代は備前國の刀匠で永享頃、出雲國庄屋に米住する。銘によれば「文安二年三月日」に贈えたもので、道水派の特色を示す。上野利治氏所蔵の「紙本着色石見銀山松谷（京）二巻」作者不明、上下二巻からなる。總長二一・〇四メートルに及ぶ長卷で画面に代官の文字があ

り、延宝三年（一六七五）以降のものである。上巻は銀山の坑内の様子を描き、下巻には主として精錬場の工程を順を追って描いたもので、當時の銀山稼の実態が伺える歴史資料である。「豊栄神社の石造群（市）一所」慶応二年七月十四日長州軍の献納による。勝源等に伝來する「絹本着色家康並びに十六代（市）一軸」は徳川家康を中心とする宿将を描いたもので、筆者は銀山附役人の四十七代目代官大間嶋右衛門貞直が奉納したものである。瑞雲寺の「石造五百羅漢坐像群附石碑（記）三所」は寛保（一七四一）～一七四三）年月日海淨印によって発願され、銀山同心中場五郎左衛門定政の尽力で明和三年（一七六六）に完成する。石工は邇摩郡福光村の坪内平七とその一門で、五〇一図の羅漢のうち四十四軒に銘がある。それによれば仏縁者は石見国一円さらに江戸城本丸の田安家（将軍家重の弟）におよぶ。「木造太元師明王立像（市）一軸」六面人臂の像で、室町期の作であるが、安政一年の修理がある。「木造三世明王立像（市）一軸」四面八臂の像で室町期の作である。以上が旧銀山領内にあ

る指定文化財でいづれも地域と歴史的に何らかの深いかかわりを有している。さらに大森を中心に近隣で多く散見されるものに、仏乗慈懶の書画と、円満斎守休や、佐和華谷の絵がある。仏乗は越前（福井県）で文化六年（一八〇九）に生まれ、文化八年に仏通禅師の法脈を得、仏乗慈懶と号す。のち江州（滋賀県）の清涼寺にさらくに長州（山口県）の長徳寺を歸て嘉永元年（一八四八）に大森町市南村の慈雲寺の住職となり、ついで大森町の榮泉寺第十九世住職となる。この榮泉寺住の十四年間は自ら住民の中に入つて仏法を弘める。慶応元年（一八六五）に美濃（岐阜県）の高麗寺に移り、明治三年（一八七〇）七十二歳で没す。大森の榮泉寺に在るとき気さくに人の求めに応じ、簡脱な絵をこした。その絵は白陰や仙塵に迫り、脱俗禪味の溢れるもので画僧傑出している。また円満斎守休は梶谷祐右衛門といい、三瓶山龍志学の加瀬村の庄屋に生まれ、幼より画が巧みでのち京都に出て、薬澤法眼藤原探索の門に入り狩野派を修める。郷里に帰省してからは、社寺に奉納の画があり、山水・花卉・人物などを描くが屏風等の作例もある。佐和華谷。

宝曆九年（一七五九）～天保二年（一八三二）は名を爛、字は伯忠・真一号を華京・太雲・五庭洞など儒学・詩歌を良くし、画を好む。のち京都にて額山陽を始め勧業諸家との交りがあり、幕吏の追求をのがれて高野山に入る。帰國後は大森町纏世音寺の住職となり、懐められて画作を遺している。画を中林竹洞に学んだと伝えられているが遠作を観る限り江戸末狩野源風で人物・山水などがあるが、趣味的な境を出でていない。作品は掛軸・屏風等がある。その子楚鶴は号を九華・石頭・方外等と称し長崎で榮葉シートボルトと交遊する。のち高野山で真言宗の僧となる。余技に詩画を能くす。この他に江戸時代初期から炳烟を中心と傳（樹烟傳）と称される鉄地で縦目縫透し揮があつて額山工人の余技の作と伝えられている。現存の古いものとして、桃山末と江戸初期の製作と思われる揮に、額山住重、在銘揮があり、江戸中期頃までこの地で技術の継承があつたと察せられるが文献は見あたらない。

以上は極めて限られた日数と範囲内の調査であったが、数世紀にわたる歴史の空白と経済的な断層は、多くの文化や美術工芸品を失

い、また特筆に価する伝承技術も消失した。こうしたなかでさきに記した指定文化財が、この地域のかつての栄光を物語っているといえよう。

（補問　事）

# 石見銀山関連遺跡分布調査報告

## 1. 調査に至る経過と調査の概要

### 1. 調査に至る経過

島根県教育委員会では、地域の風土と一体化した歴史的環境をもつ文化財集中地区の保存を図るべく、昭和五十三年に島根県文化財保護審議会の答申を得て「島根県文化財保護行政計画」を策定し、津和野町、益田市、浜田市、大田市、出雲市、玉湯町、安来市、広瀬町、西郷町の十地区を集中地区として選定して、昭和五十四年度から昭和五十七年度にかけて「広瀬町内遺跡群総合整備計画策定事業」を実施してきたところである。昭和五十八年度からは第二弾として大田市、邇摩郡温泉津町、向仁摩町、邑智郡邑智町の協力を得て「石見銀山総合整備計画策定事業」を得て、「石見銀山総合整備計画策定委員会」を設置し、「石見銀山総合整備計画策定事業」の地域を示す名称で、現在の行政区画では、

を実施して来た。

その事業内容は策定委員会の事業（委員会の開催と調査）と国庫補助を得た調査事業の二本立てであった。実施した国庫補助事業は昭和五十八年度石見銀山遺跡発掘調査（事業主体大田市）、昭和五十九年度「石見銀山関係資料調査（事業主体島根県）」であり、そのアプローチは発掘調査、歴史資料調査と異なるものの、石見銀山の歴史を解明しようとした意識の根本に於いては、まさに同一のねらいのもとに進行なわれたものと確信している。

本年度の調査は、そうした「石見銀山総合整備計画策定事業」の一環として国の補助を得て島根県が実施したものである。

従来、石見銀山が語られる時には「銀山日記」など数少ない文献を元にされることが常であった。ところが、例えば「銀山百ヶ寺」（大田市大森町）と言われるような寺院跡について見ても一部の寺の名前、開基、宗派等、文献に見える範囲のことしか判っておらず、その所在地についても一部有名なものを除い

大田市大森町、邇摩郡仁摩町大國町柏子谷あたりを言うものと考えられる。しかし、江戸時代には石見銀山銅料（銀山銅料）としての天領をも表現するようになつた。天領としての石見銀山は多少の変化はあったものの現在の行政区画でいえば、大田市、邇摩郡仁摩町、邇摩郡西条町、邑智郡邑智町、邑智郡大和村と江津市および邑智郡羽須美村の一部を含む地域であった。本書で言う石見銀山とはおよそ後者を示すものと理解されたい。

### 2. 調査の概要

て明らかでなかった。今回の調査では、大田市、瀬戸郡仁摩町、瀬戸郡温泉津町、邑智郡邑智町、邑智郡大和村、邑智郡羽須美村、飯石郡赤来町の一市六町村に所在する関連遺跡を分布調査して、足で確認することに務めた。

調査対象としたのは前記七市町村に所在する城跡、番所跡、寺院跡、街道跡、泡萬跡、鉢山跡、製錬所跡、墓地（跡）、石塔、道標等であった。いずれも、調査カードの作成を行つた。これ等のうち、城跡においては、山吹

城の吉迫地区（大手口—大久保石見守長安陣屋推定地）の三〇〇分の一の地形測量を実施し、戦国時代末から江戸時代初頭と考えられる石垣の配置状況の確認を行つた。また、大田市大森町においては、前記「銀山百ヶ寺」の確認に務めたが、この調査の途中で、天正から慶長にかけての宝篋印塔、一石五輪塔が多数発見されたので、この拓本、実測を行つた。この他、銀の輸送にかかる助郷訴訟文書等一部の古文書調査も実施した。（ト部吉博）

仁摩町では帽子谷の平田城跡から石見山城跡まで宅野方面に向けて道路沿いに点々と城跡が存在する。この内、石見山城跡は、振り切りや土堀を残している。築城年代等明らかでない。

温泉津町では、湯里に温泉城、福光に不言城がある。前者は玉造から来た温泉氏の居城と言われ、後者は石見吉川氏の居城であった。沖泊には港を守備した、櫛山城跡、鶴ノ丸城跡がある。

邑智町に於いては佐波氏關係の城跡が多数存在する。この内、青杉ヶ城は特に著名であるが、尾根上に点々と郭が存在し、丸尾城、安右エ門山城と呼称するも、その区切りがあり明確ではない。

大和村にも佐波氏、高橋氏關係の城跡が多数存在する。要路城は郭の数が約二十五あり、縦掘、敵闘、振り切り等構造も多岐に亘つてゐる。

羽須美村は、口羽氏の本居地で、出羽川に

毛利氏が山吹城の奪取を試みて在陣したといわれているが、かなり広い範囲に郭が分布する。今後、さらに充分な分布調査と、実測が必要である。

## 2. 各遺跡の概要

### 1. 城跡

石見銀山の開発の開始は、およそ十六世紀といわれ、戦国時代という背景と相俟つて、この地域は大内氏、小笠原氏、毛利氏、尼子氏の争奪戦が展開されたところである。この為、銀山周辺には数多くの城跡がある。とりわけ山吹城は銀山統治の中心として存在しており、争奪の中心となつたところである。山顶部分の構造だけを見ると主郭部で三十三メートル×五十二メートル、広瀬町の宮田城よりも二十メートル×三十五メートルを測る。仙山は永禄三年に

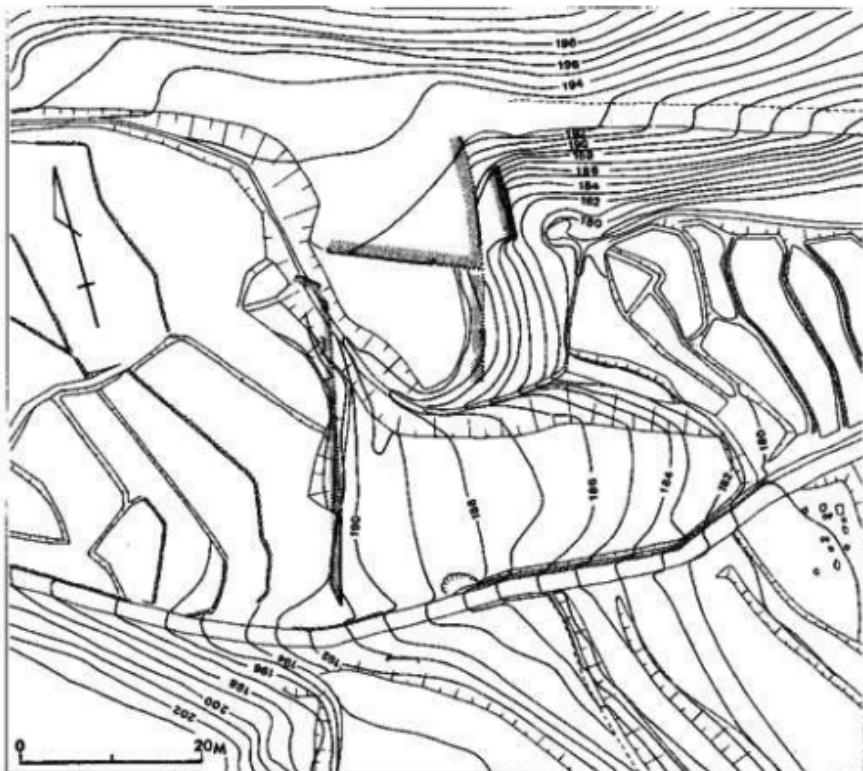
東・南・北の三方を囲まれた天然の要害に築かれた琵琶甲城がある。この城の縦割りは巾三mと五mの広いもので、比高差も三十cmと四十cmあるものもある。また、山麓には三方を土壁で囲まれた施設状の施設も存在する。赤来町には赤穴氏が居城とした瀬戸山城がある。慶長五年廢城となるが、跡には石垣が残っており、県下の城跡のうち、石垣の導入過程を知る上で重要である。

## 2. 寺院跡

石見銀山に伝わる言い伝えとして「銀山百ヶ寺」ということが言われている。これは、百ヶ寺を数える程、銀山が繁盛したという意味か、現実に銀山に百ヶ寺あったのか、また、一時期には百ヶ寺まではないが、廢寺になつたり、移転したりした寺を合計した数であるのか興味のあるところであった。

調査の足がかりにしたのは「寛政元年 石見国銀山繪図」（高橋家文書）二十六ヶ寺、

「慶応三年丁卯年元月寺社家現名書報仁摩郡銀山町」（高橋家文書 上野家文書）二十九寺や切図であった。しかしながら、絵図と現地



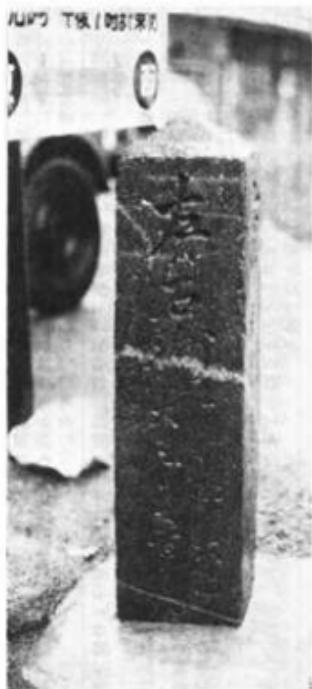
山吹城大手口付近実測図

や、上野武三氏に絵図の位置を二千五百分の一の地図におよその位置をプロットしてもらうことから始めた。しかしながら、いざ現地調査を始めて見ると山が荒れていることや、山の中では目印になるようなものが少なく躊躇した。

結果として大田市大森町地内で三十三ヶ寺の寺跡を確認することができた。しかしながら細川幽斎の「九州道の記」(天正十五年)に見える慈恩寺等は現在も今もって明らかにならない。また、周辺地域に存在する寺で元は銀山にあったことが明らかになっていながらもかわらず、その所在が明らかになっていないのが多々ある。一方、今回の調査で寺の跡が確認されたものの内、その大半は、その伽藍配置等詳細は明らかになっておらず今後の調査に期待する部分も多い。

### 3. 街道跡と道標

天正十五年に細川幽斎が石見銀山を訪れているが、この時のルートが一つの参考になると思う。この時は仁摩から銀山に入り、温泉津に抜けている。仁摩から銀山に入るルートは柑子谷を通り畠坂を越えたのか、あるいは、



道標 左 宅野の道標 中 松山の道標 右 赤名の道標

大田市大森町銀山地区寺院一覧表 (黒河郎之 作成)

寺院名	宗派	創立年月日	付記
○清水寺	真言宗	延暦17年 (798)	最初は石銀山の頂にあって上宮太子が建立し天智寺という(天池寺ともいう)。清水寺様式より。延暦17年(798)に清水寺と改号し清水谷の地に移転する。清水谷最後の堂宇は安政の終りから方丈殿、4年9月2日の竣工印下8枚が保存されている。清水谷最後の堂宇は安政の終りから方丈殿、4年9月2日の竣工印下8枚が保存されている。清水谷最後の堂宇は安政の終りから方丈殿、4年9月2日の竣工印下8枚が保存されている。延元年にかけて建立され、五間四面の本堂の外、仁王門、鐘楼、山門、講堂、立本、庫門、未林、十藏等の諸堂宇ありと記されている。
○神宮寺	真言宗	大文18年 (1549)	未林、十藏等の諸堂宇ありと記されている。明治11年に休み谷に移り宝珠寺跡に遷する。昭和6年3月、神宮寺、長榮寺を合併。
○長榮寺	真言宗	不 明	天文18年8月、製鐵改大工開業発願し信義店を建立。山神宮別当にして石銀山の麓にあった。慶長16年(1611)3月大火災にあり、信義店へ移り再建する。明治10年9月、昆布谷の長榮寺を合併する。同32年9月、大森村字川岸町半に移転し堂宇を改築する。人正11年3月8日、暴風のため全焼し其の後再興の計成らず昭和6年清水寺に合併。
○大音寺	淨土宗	慶長15年 (1610)	長榮寺はもと仙ノ山にあり、その後昆布谷に移る。明治10年9月、神宮寺に合併する。同32年9月、大森村字川岸町半に移転し堂宇を改築する。天狗堂は元就公建立、自業機札あり。本尊は役之行者直作と伝えられている。
○大安寺	淨土宗 極樂寺末	慶長10年 (1605)	本尊、阿彌陀如来。慶長15年8月本寺第三代目住職良船圓基。その後、文化年代に火災にあい、諸尊頭髪失し仏像のみ残る。同寺住職告心再建(年不詳)。境内仏堂として妙見堂(寛永年中建立)、極樂寺に合併する。
○極樂寺	淨土宗 鎮西派	永禄3年 (1560)	本尊、阿彌陀如来。慶長10年、極樂寺第三代目住職良船圓基。大久保石見守より建立寄附。その後度々修理し、明治8年再建。大正初年に焼失する。境内に大久保様の墓所あり、「大安院義正著」的朝覲大居士。慶長18年慶長四月廿八日。永禄3年四月本山清淨華院第三十一代住職良林和尚の開基。毛利元就公より地所を押受し本山出張所と定められ、その後、元龜二年(1571)六月、極樂寺の名を継わり、寛永年中再建。享保年中修理、明治12年内々達。境内佛堂として地藏堂、藥師堂。同寺貢天井は旧山吹城天井閣の天井をそのまま持つて来たものといわれ、当時の山吹城の模倣を見る一資料であった。昭和14年火災で焼失。

○大慈寺	臨済宗	天正10年以前 (1582)	本尊、觀音如來。歎せ天正12年3月、以通和尚開基となっていたが、今回の分布調査で開基の石碑が見つかり、その碑文には「天正十年壬午四月十六日大慈閣山以清真人和尚」とあり、それ以後ということがわかった。この堂宇は嘉永4年6月20日大洪水のため破壊したので、當時業務であった浜原村、妙用寺14代住職州利尚が再建した。
○西福寺	淨土宗 鎮西派	不	本尊、阿彌陀如來。由緒は中古喪失につき不明。
○西向寺	淨土宗 鎮西派	不	本尊、阿彌陀如來。由緒は中古喪失につき不明。
○妙本寺	日蓮宗	不	本尊、觀音多宝佛尊。開基は宝泉院日綱上人。元龜5年4月8日創立(注、大正11年発行、その後天明2年(1782)に焼失のため善類一切焼失せず不明)。
○本法寺	日蓮宗 勝劣派	不	本尊、祖師日蓮。鍋山清水谷の本法寺境内に開基等記の石碑あり。それによると開基は日綱上人、一代日賀上人、二代日陽上人となっている。古文書、漫荼羅(唐紙)一軸但し本門宗第一祖日興上人等、正中元年(1324)2月8日。
○厭勝寺	真宗東派	不	本尊、祖師日蓮。鍋山清水谷の本法寺境内に開基等記の石碑あり。それによると開基は日綱上人、一代日賀上人、二代日陽上人となっている。古文書、漫荼羅(唐紙)一軸但し本門宗第一祖日興上人等、正中元年(1324)2月8日。
○厭勝寺	真宗東派	不	元天台宗南古庵といい、のち第8世了明が改宗改称する。大正15年(1926)本山萬德院の第8世教如上人が九州へ行かれた時、了明が隨行し帰路当寺に三年間滞在院跡には三度目の地で以前はトガ舞にあった。その後火災にあい現在存するものは觀音と稱だけである。
○厭勝寺	真宗東派	不	明治27年大里町に移転する。
○妙正寺	日蓮宗 妙榮寺派	不	当時の古文書類は久手町の森下亮氏が保管されている。
○吉祥寺	曹洞宗	元龟年 中	本尊、三寶祖師。元龜水谷にあって本遠院という。その後大破に及んだが承正11年(1514)日忠という旅僧が再興し、同年5月15日観音へ移し寺号改称。
○吉祥寺	曹洞宗	元龟年 中	本尊、觀音坐像。元龜年中(1510-1513)に一陽雲禪寺12世英隆の開山と伝えられているが、宝永2年ごろ(1705)より鍋山龍泉寺の末寺になり、同時に10世元山が建立する。その後、安政6年(1859)4月崇光寺19世慈舟謹中を再建したのが明治5年の開基である。堂宇が破壊したが、同12年5月崇光寺慈雲和尚の代に再建し、同時に崇光寺末となる。

寺院名	宗派	創立年月日	付記
本經寺	本門宗	不	明
○龍昌寺	曹洞宗	応永年中	本尊、日蓮上人。元禄中期の銀山古地図に大谷跡に繪図として載っているがその他については不明である。
安立寺	淨土宗	不	本尊、秋邊牟尼仏。王峰山龍昌寺は応永年中（1394～1428）に大和國補佐寺開山了空禪師が建立国源院の廃跡、銀山仙ノ山山中に墓塔を結んで一年、所持の杖をこの庵に留め和州に皈依したが寛正年中（1460～1466）に山吹城内に移し内寺と成す（以上、石見国神社案内）。また永正年中（1504～1521）に山吹城の内寺が了空禪師の遺跡あることをもつて銀山に来て慈光寺を建立し大永7年（1527）山吹城の内寺に移り、後口に庵があることをもつて龍昌寺と改め、多々良徳院より寺領一百分石を寄附せられしが承暦宗中（1558～1570）度々征役の事ありしに由て人に失なきを以て寺領を差出す。文禄3年（1594）曹洞宗の根舟寺となり、また教説所と定められる。その後、慶長9年（1604）行持所へ出誠し現境内へ移し諸堂を建立する。同年守護を龍昌寺と改む（以上、石見国神社案内）。昭和30年頃、久利町の福昌寺と合併し、福昌山龍昌寺となる。
○宝珠寺	真言宗高野派	文様年間	今回の遺跡分布調査で同寺壇所にて天正、慶長年間の石碑多數を発見する。
○太鼓堂	不	明	本尊、阿弥陀如来。陣地拾五石二斗。毛利元就之像有。
薬師寺	真言宗高野派	不	陣地拾石。毛利輝元寺附の龕有り。鶴岡安芸守謙友鑑之。本尊阿彌陀如来。合寺日蓮誕本尊觀世音菩薩、又様年間（1592～1595）大江朝臣毛利輝元其孫と共に武藏・長久哲願道場として大蔵町銀山に建立したが明治10年6月8日、高野守生穂将滿和尚令法久住のため、二所村田沼平田氏の先白空庵へ合寺し、寺庵共存を開拓される。自空庵は元禄年中（1688～1704）僧白空の開創である。
○西善寺	浄土真宗本願派	不	明治11年、当寺跡地へ消水寺が建立される。
			除地拾石。大坂領として毛利元就之時。建寺時は不明であるが元禄中期の銀山古地図には絵図として記載されている。
			本尊、藥師如来。もと消水谷にあった。川北片の本龕にて建立し如意寺といっていたがその後堂宇破壊し、消水寺境内に移り、その後廢寺境内へ移転する。
			本尊、十一面觀世音菩薩。貞永元年（1684）武藏國産大僧都惟尚師が銀山へ来て木堂及び諸堂宇を新築する。
			本尊、阿弥陀如来。元真言宗で銀山にあり、開基は祐淨という。
			第5代開傳が改宗し、明治7年馬路村押子路に移す。
			同14年6月再建する。

専念寺	淨土宗 知恩院末	不	明	本尊、阿弥陀如来。もと銀山の稻削谷にあったが元暦二年（1689）大蓮院を釋迦院が仁摩郡里村に移転する（移転年月不明）。
○大満寺	淨土宗 清淨華院末	寛永 2 年 (1625)		圓山は近傍の大和尚。寛永 2 年（1625）銀山林谷に「宇魔御無住の寺があるのを幕府の許可を得て享保院大和尚（1716）鳥井村へ移転する。文政 3 年（1820）6 月、本堂内燃する。開基は石川勘左エ門となつており敏の早世をなげき僧となり一寺建立を発起して林谷に隨天和尚が開山する。
光蓮寺	淨土真宗 本派	不	明	開基は洋心で、もと銀山の吉辻にあったのを、享保 21 年（1736）3 月、水上村二久須に移転する。
頤勝寺	淨土真宗 本派	慶長 8 年 12 月 18 日 (1603)		元銀山の昆布川谷にあったのを出雲國吉井宮村に移し（年月不明）、そして同郡三原村へ転地し、そして仁摩郡水上村二久須に移転する。
淨福寺	淨土真宗 本派	慶長 9 年 (1604)		慶長 9 年（1604）8 月創立。開基は祐尊。もと銀山の本谷にあったのを正徳 3 年（1713）3 月、恵林の代に仁摩郡水上村に移転する。
明恩寺	淨土真宗 本派	元和 6 年 (1620)		もと恵心寺という別称である。其の本尊に奉仕する。そのち船山にあつた明恩寺を大東村に移して合併する。その後、明治 26 年 1 月 17 日に火災にて焼失する。
月照寺	曹洞宗 巖昌寺末	天正 4 年 (1576)		本尊觀音牟尼如來。天正四年（1576）熟史奥傳和尚の開創にして、元銀山大谷にあったのを正徳三年（1713）天河内の萬興寺普利和尚が井田村祇口に移す。
淨円寺	淨土真宗 本派	天文年間 (1532~1555)		もと天台宗であつて銀山下河原町にあったのを天文年間（1532~1555）当社権野へ移し改宗する。天正年間（1573~1592）当山住職の了恩が五十疊村大浦の現在地へ移転し堂宇を建立する。
○長泉寺	淨土真宗 本派	不	明	もと禪宗であつて銀山下河原町にあった。天文年間（1515~1624）住職空玄の代に改宗し長泉寺と号す。元治 12 年（1869）10 月 28 日、五十疊村源の城在地に移す。
淨光寺	淨土真宗 本派	不	明	元銀山下河原町にあった。天文年間（1532~1555）の大洪水で崩壊したが再建する。正徳 6 年（1715）「享保元年」付持林丹の代に仁摩郡大園村山根に移転する。

寺院名	宗派	創立年月日	付 記
勝立寺	曹洞宗 龍昌寺末	承保11年 (1726)	本尊、觀音如來。当時は銀山にあったが承保11年(1726)2月、「仁摩郡大國村へ移し、中原三郎兵衛、井上六郎兵衛等が田畠山林を専用し、雪藏海師を銀山とする。文政2年(1802)焼失後再建する。
願泉寺	淨土真宗 本派	不 明	元真言宗であつて金剛院といつた。 仁摩郡佐摩村銀山にあったのを天文16年(1547)、僧教禅が改宗して寺院名も覺法寺と改称する。 その後、邑智郡吉郷村寺ノ迫へ移転する(年月日不明)。
正願寺	淨土真宗 本派	不 明	元銀山の大谷にあったのを享保年中(1716~1734)に静岡村八日市に移転する。
報恩寺	淨土宗 方	万治2年 (1659)	元銀山にあり焼失後延里村に移転する。当時福原村だけでも數十軒の門徒があり、延里村に移つたのは宝暦の初めといわれている。 現在の堂宇は明治41年4月の再々建。
定徳寺	淨土宗 知恩院末	永禄元年 (1558)	永禄元年(1558)尊嘗上人が銀山に創立する。 元禄年間(1688~1703)宮殿の代に仁摩郡五十嵐村畠井、丸山七郎兵衛の助力によつて畠井に移転する。
淨趣寺	淨土真宗 本派	不 明	本尊、阿弥陀如來。元銀山にあったのを宝永7年(1710)川根七左衛門が邑智郡伊藤村へ移す。 元神宗で銀山にあつた。承暦年間(1558~1569)に改宗する。 寛永年間(1624~1628)に住職正順の代に邑智郡川越町瀧村に移転する。
荒神寺	眞言宗 高野派	元禄年間 (1688~1703)	宝暦4年(1754)2月18日、木藤守房を許され、淨慈寺と称していくが、H蔵淨慈寺に復す。 元禄年間(1688~1703)の創立で成親和尚を開山一世とする。 寶曆年不明であるが邑智郡吾妻村吾妻の赤智寺へ移す。大樹越山根八た萬門開削は若狭城主のため一寺建立の志願を廃し、自から本願寺となり、銀山の荒神寺を移し、ついに成就する。
快算院	眞言宗 醍醐寺末	不 明	本尊、正觀世音菩薩。元銀山大谷にあったが享保8年(1723)6月、木村森氏の先代で萬信者久兵衛といつても、諱治村の本尊へ移し山林田畠を悉く寄附する。
専応寺	淨土真宗 本派	不 明	本尊、阿彌陀如來。銀山の石根にあったのを元和13年(1703)に那賀郡下松山村に移転する。(年月不明) 明治16年12月15日焼失する。同26年8月4日再建する。

淨國寺	淨土宗 知恩院末派	不 明	本尊、阿弥陀如來。正徳4年(1714)10月23日、那賀郡下松山村上河内へ移転する(年月不明)。
○總善寺	淨土真宗本派	慶長17年(1612)	本尊、阿弥陀如來。慶長17年(1612)教祖が巌山大谷の地に創立す。 明治194年5月25日、那賀郡今市村原本に移転する(現、旭町今市)。
恵光寺	淨土真宗本派	寛永2年(1625)	寛永2年(1625)8月15日、僧玄和が創立する。 正徳元年(1711)2月、五世玄了が現在出市久峰へ移す。
法華寺	淨土真宗本派	天文23年(1554)	天文23年(1554)巌山にて創立。 もと巌山八軒見世にあった真言宗巌山寺を第2世常玄の時法華寺に改める。3世當円の時火災にて全焼し、4世常芸の時、寛永17年(1640)鳥井村山根に移転する。 寛永元年(1684)本堂落成。元禄11年(1698)塔頭造立する。文政5年(1822)には経藏を建立する。
○長福寺	曹洞宗	不 明	元禄中期の古地図及び寛政元年の繪図には巌山足布山谷に圖示されている。 創立時は不詳であるが、明治14年4月23日に久村にあった長福寺に合併される。
蓮教寺	淨土真宗本派	慶長15年(1610)	銀山柄細谷からいっこう出たかは不明であるが本時の段起には次のように記してある。 銀山柄細谷の竹村丹後守が木佛尊像を供奉し、普請するや直ちに柄細谷を開き一宇の坊舎を創設。其の供奉する木佛尊像を奉安し朝夕礼拝供養怠らざりき。 この佛像は同教院初来の立像にして聖徳太子御製作一刀三拜の御遺像なり。この佛像を48ヶ即ち本傳の菩薩48に解体することを得。御輪の中には長方形の木札ありて聖徳太子御配刻を証明せらる天下傳有の御遺像にして世に三体の一つと称す別名「聖徳太子御輪」。が宝物の初代本山柄門跡開拓により、銀山柄細谷十七代天野助次郎氏の手を経て本山に送りしが其のまま書籍不明となり。
泉光坊	不 明	不 明	元禄中期の巌山古地図及び寛政元年の繪図には大谷の奥、坂根口番所近くに圖示されている。 が詳細は不明。

大國から大森へ越えてきたのかよく判らないが温泉津に抜けるのは郷路坂を通つたものと見てよいと思う。銀の搬出ルートは毛利氏の時代には温泉津の古柳港とか、沖泊港とかが利用されていたものと思う。大森から大坂が利用されていたものと考えられるのでやはり郷路坂が利用されていたものと考へられるのでやはり郷路坂が利用されているルート上には大國地内に道標が残っている。また、郷路坂を越えるルート上には温泉津町松山地内に道標が残っている。

江戸時代になると、銀の搬出ルートは大森—萩原—別府—柏原—浜原—九日市—湯谷—赤名を通りて尾道に行くことになる。大森から出発して九日市で一泊、三次で一泊して二泊で尾道まで至る。赤名には道標がある。

#### 4. 番所跡

今回の調査で確認したのは大森では、龍泉寺口番所、板根口番所、温泉津では温泉津番所跡、邑智町では酒谷番所跡、大和村では都賀行口番所跡、都賀番所跡を確認したが、この他にも、文献上ではまだまだ多くの番所跡が知られているが、現地では確認できなかつた。今後発掘調査等を通じてその内容を明らかにする必要がある。

#### 1. 石見銀山の石造物について

##### 石見銀山の寺院跡

石見銀山の発見は、鎌倉時代と考えられるが、大永六年（一五二六）に銀鉱の坑道探査が開始され、また間もなく灰吹法によって現地で銀の精錬がおこなわれるようになって、産銀は急増した。銀山が隆盛を極めたのは、慶長から寛永にかけてのころ（十七世紀前半）で、「銀山日記」には、このころ「家数二万六千軒余、寺百ヶ寺程も」あったと記している。

一〇〇か寺という寺院數はにわかに信じがたいが、銀山の狭い谷間におびただしい人が密集していて、これに対してかなりの数の寺院が存在したことが推測される。

戰国時代、銀山が開発されてから現在に至るまでに創立されとして廃絶、合併あるいは

されていないものも多いと思う。温泉津町福光では福光石の石切り場等特色のある遺跡もある。

（下部吉博）

#### 3. 石見銀山の在銘石塔について

移転した寺院はかなりの数にのぼることが考

えられるが、現存するもののほか地名にその名をとどめているがまだ実態が確認されていないものを含めて、約七十の寺院名をあげることができる。（註）

これらの寺院の中で、現存するか、現存しないがその所在、寺域などが確認できるもの多くは、その後背地や周辺などに墓地があり、各種の石造物が存在する。

註1 石村祐久「石見銀山異記下」石見銀山資料館、昭和五十七年

##### 石造物について

石造物の數量、種類などについては、その寺院あるいは墓地の継続年数によつてちがうが（寺院は現存しなくとも墓地は一部分は継続して使用されているところもある）、古くから墓地ではおびただしい数量の墓石が

放置あるいは一隅に積みあがられているところがあり、そのような現状にたつと、まさに鬼哭啾啾といった感がする。

種類としては、宝鏡印塔、五輪塔、無縫塔、石仏、各種の墓碑や記念碑、その他特殊な石造物など多岐にわたるが、最も多いのは近世以降の方柱型の墓碑である。

石見銀山の石造物については、これまで国史跡天正在銘宝鏡印塔基壇、佩刀跡竹村丹後守道清墓所の宝鏡印塔、龍昌寺元寺城の宝鏡印塔、五百羅漢坐像群の室鏡印塔、その他周知のものについて調査、指定され、保護されているが、そのほかのものについての調査はあまり進んでいない。

ここでは中世末、近世初頭の年紀あるものについて調査した概要を述べる。これらほとんどは放置され、朽木、落葉の下に埋れていたもので、今後悉皆的な調査をすればさら

に発見される可能性がある。

石塔について（1、4、10）

調査したのは三基である。いずれも小形の一石五輪塔で、石材は当地方で多用されている凝灰岩質の福光石系統のものである。

10は、高さ六三・六〇（復元高六四・四〇）地輪下端辺長二二・二〇、地輪、火輪の面は

年創立と伝えるが、明治十九年に呂賀郡に移転した。境内には、銀山川沿いから背後の山までのほぼ四十m×二十五mの広さで、東に開いていたと考えられる。現況は畠地で、伽藍の配置を示すものはすべて失われているが、背後の山の岩壁をほりこんでつくった浅い窟が四か所あり、そこに上の石段も残っていて、中に宝鏡印塔が置かれていたことがわかった。これは基礎が一辺一・五mの大きなもので、倒壊、破損しているが、総高二・一m以上のものであったことが推定され、二基以上あったと考えられる。また銀山川の川辺や岩壁の下方（畠の周辺）には小形の一石五輪塔、宝鏡印塔や墓碑、石仏などが多数散在している。また背後の山丘の斜面には墓地があり、おびただしい石造物が散在している。岩壁下方の一石五輪塔などはこの上方の墓地から転落した可能性もある。

火輪の正面には円内に浅い彫りで阿弥陀の種子のキリーケを配している。

1は、高さ五〇・六〇（復元高五一・八〇）地輪下端辺長一四・三〇で、底はない。地輪はたてにやや長く、上方がやや狭くなっている。底面は浅くくり込まれている。正面には、「□□」六年、「□真存□童女」、「三月□日」と塔銘が三行に分書されている。

4は、火輪以上を欠くが、水輪までの高さ二六・四〇、地輪下端辺長一四・〇〇で、地、水輪の形状、法算は前記1とほとんど同じである。地輪正面には、塔銘が「慶長十二年」、「□正童子」、「十二月廿八日」と三行に分割されている。

## 2. 調査の概要

### (1) 德善寺跡遺跡の概要

銀山川の上流に近い大谷奥の坂根口所跡隣接地にある。淨土真宗の寺院で、慶長十七

これらの二石五輪塔は、塔銘からしていずれも童兒の墓碑であると考えられる。これらはいずれも中央に成名などが刻されているのが特徴である。

### (2) 妙像寺墓地遺跡の概要

妙像寺は、国史跡佐尾元山神社に近い板畠谷にある日蓮宗の寺院で、栗山に墓地があり、各種の石製塔婆類が散在している。

#### 石塔物について（7）

調査したのは7の一基で、他の例からして小形の宝篋印塔の墓壇であると考えられる。

石材は耀光石系統のもので、二段積みの墓壇の上にえられていた。上部は失われていて不明である。法量は、下端辺長三〇・三九、高さ三〇・一〇で、ほぼ一尺につくられており、底面にはくり込みがある。亞はない。正面中央には、仏壇、厨子などによく用いられる格狭間を模した多角形のものが浅く彫り回らされていて、更にその中央に連の字を彫刻している。この左右には四行に分けて「奉供養石塔一基」、「為家翁宗仙禪定門也」、「千時天保六年八月〇〇〇」、「孝子敬白」の塔銘を刻んでいる。正面向って右の面には中央に地

の一字が刻られている。この墓壇の上部には、深い蕉葉彫の刻線で区別して、一種の反花座が彫り出されている。即ち両隅と中央に深い蕉葉彫り様の刻線で複弁の蓮弁を彫り出していが、刻線だけの表現で、蓮弁の面には丸味もなく、形式的なものになっている。

この反花座の上には塔身を受ける方形台状の段がつくり出されていて、その側面にはたてに刻線が入れられている。

この塔は、塔銘から供養塔として造られたものであることがわかる。

### (3) 龍巖寺跡遺跡の概要

銀山川沿いの安養寺北側の谷の奥にあり、長い石段を上りつめたところに、幅四十九、奥行四十五、高さ二十九・三〇で、ほぼ一尺近くつくで創立は古く承永年間といい、その後幾度か銀山内を移動したと伝えるが、昭和三十年隣接する久利町に移転した。移転が新しいので、境内には低い墓壇が完存していて、伽藍配置などがよくわかる。裏山の急な斜面には墓地が広がっていて、境内に近い北東の斜面には県史跡元和三年（一六一七）在銘宝篋印塔二基や四代官の墓所が存在し、その奥には広い

範囲におびただしい数の宝篋印塔、五輪塔、その他の石造物が散在している。

#### 石塔について（3、5、6、8、9、10）

調査したのは六基で、石材はいずれも耀光

石系統のものである。

6は、妙像寺跡7と同様小形の宝篋印塔の墓壇であると考えられる。下端辺長二九・八九、高さ二十九・三〇で、ほぼ一尺近くつくられており、亞はない。底面にはくり込みがある。正面には、中央に地の字が彫刻され、両側の端に沿って三行に「奉為坂眞淵聖長泉禪定門」、「善提者也」、「慶長二年丁酉九月廿七日孝子敬白」の塔銘を分割している。

そしてこの上部には反花座が彫り出されていて、さらにその上には方形台状の段がつくり出されていたが、形状等は7とほとんど同じである。

3と5は、一石宝篋印塔で、いずれも相輪の大部を失っている。3は、現高六〇・〇

cm、墓壇下端辺長二六・五〇、墓壇正面の中央や上方に阿闍梨の釋迦牟尼佛坐像<sup>（註）</sup>、両側の塔にそつて三行に分けて「奉為坂眞○□妙義寺定尼僧證○□」、「慶長二〇〇丁年〇〇〇〇」と塔銘を刻んでいる。上部には反花座が彫り

出され、さらにその上には塔身を受ける方形状台座が設けられているが、形状などは7、6とほとんど同じである。

5は、現高六三・五cm、基壇下端辺長二一・八cm、基壇正面中央に身の字を彫刻し、両側に「為船道無<sup>レ</sup>道本神定門也」、「慶長十七年卯月十七日」と塔銘を分割している。基壇上部には、塔身を受ける運舟をした形のものあり、また相輪は運舟を書き寄せた形のものである。

8、9、11は一石五輪塔である。

9は空、風輪を欠き、現高四九・二cm、地輪下端辺長二一・〇cmで、歪はない。底面にはくり込みがある。地輪正面の上部中央には、梵字らしきものが刻されており、くずれているが地輪のアカと思われる。また水輪にも刻字の痕跡があるが剥落していく確認できない。火輪には一部が残っているがラと考えられる。

地輪の種子の左、右及び下方には四行に分けて、「泰為月更淨明禪定門也」、「施主」、「[印]」、「于時大正十八年十月廿七日」と刻まれている。

11も空、風輪を欠き、現高三八・七cm、地輪下端辺長一四・八cmで、歪はない。底面にはくり込みがある。地輪はたて長で、上方わずかに狭くなってしまい、正面には二行に分けられて「為佛真妙<sup>レ</sup>童子也」、「于時慶長十六七月□□」の塔銘を刻んでいる。

8も火輪以上を欠き、現高二八・五cm、地輪下端辺長一七・〇cm、主軸がわずかに傾いており、地輪の面は二層のふくらみをもつ。底面にはくり込みがある。地輪正面中央には地の字を刻し、側によせて「華為月秋童子也」「天正念日壬辰九月廿三」と塔銘を分割している。水輪には水の字が刻まれている。

ここであげた六基の塔は、塔銘からしていずれも供養塔として造られたものであることがわかる。供養塔では、地輪正面中央には種子などが刻まれている場合が多く、塔銘は両側に刻まれるのが通例であったと考えられる。

(4) 大龍寺跡遺跡の概要

この無縫塔2は、凝灰岩質のもので、二段の基礎の上にすえられて、高さハハ・〇cm(復元高ハ九・二cm)、方形基壇下端辺長三一・〇cm、約一尺である。つくりは極めていいのである。塔は上部の塔身と蓮花台、下部の基礎に分けて、二石につくられている。基礎の面には六cmほどのふくらみがある。正面には、塔銘が四行に分けて、中央に「大竜の全城を占めて幅約六〇cm、奥行約四〇cmの広大な境内地が広がっている。臨済宗で、創立は天正年間といい、明治二十七年益田市へ移転した。移転が古く、伽藍配置を示すものはあまり残っていないが、ただ北側隅に境内

に面した辺を高さ一・二mの石垣で整えた塙があり、上面に礎石らしき石が点在している。裏山には墓地があり、宝篋印塔などが散在している。塙の後には、寺の墓地があり、歷代の住職の無縫塔が並んでいます。今回調査したのはその中の開山塔であるが、他の塔がかなりいたんでいるのに比して開山塔はほとんど風化もうけておらず、後世造立の疑いもなくはないが、反花座などの彫刻が古式であることをから、當時造立のものと考えたい。

#### 塔について(2)

この無縫塔2は、凝灰岩質のもので、二段の基礎の上にすえられて、高さハハ・〇cm(復元高ハ九・二cm)、方形基壇下端辺長三一・〇cm、約一尺である。つくりは極めていいのである。塔は上部の塔身と蓮花台、下部の基礎に分けて、二石につくられている。基礎の面には六cmほどのふくらみがある。正面には、塔銘が四行に分けて、中央に「大竜開山以清源大和尚」、その左右に「天正十一年」、「四月十六日」、左端に一段下げて「小師惠洪<sup>レ</sup>」と篆研形態に整った書体で分割されている。基壇上部の反花座や方形合状の段は、手法、形状が6、7とほとんど同じじ

である。塔身を安する蓮花台は、厚く彫り出した素弁のものが二段に葺かれていて見事である。

### 3. 小 結

#### 小形一石五輪塔。

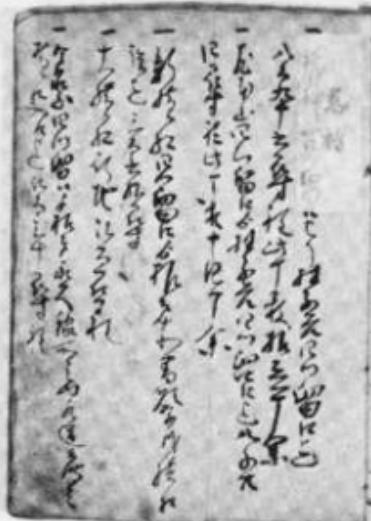
#### 小形宝篋印塔などについて

以上、天正・慶長期の少數のものについて概要を述べたが、ここで若干のまとめをしてみたい。

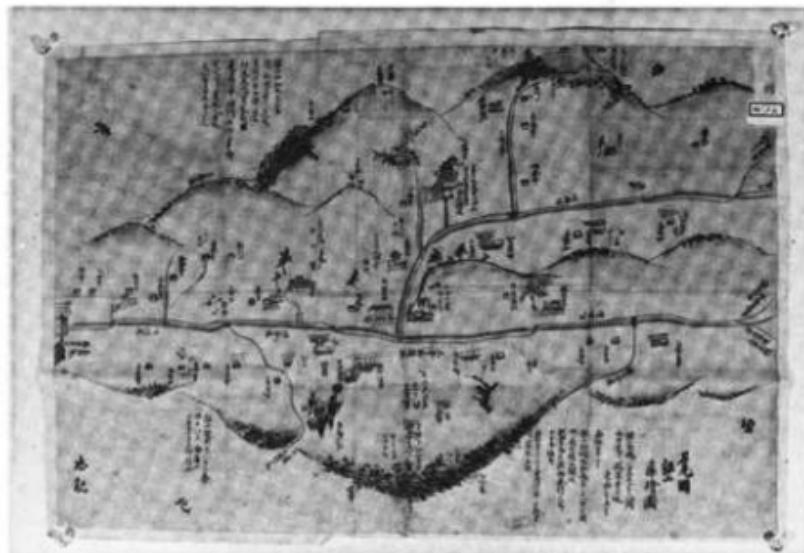
まず小形の一石五輪塔には、童兒の墓碑あるいは供養塔として造られたものが多いことが注意される。これらの五輪塔は、簡便に、方柱状の石材を彫り込んで造っており、そのため上から下まで径があまりかわらず、落ち着かない形状のものになっている。

また一石のものも含めた小形の宝篋印塔や無縫塔などで、基壇上部の反花座とその上の塔身を受ける方形台状の段の彫刻には極めて特徴的な様式があることがわかった。一見稚拙な感じのするこの手法が、この地方の形式であり、当地方におけるこの種の石造物の細年において、重要なポイントになるものである。

(選闇 法曉)



高橋家文書「銀山旧記」



高橋家文書「社寺番所図」



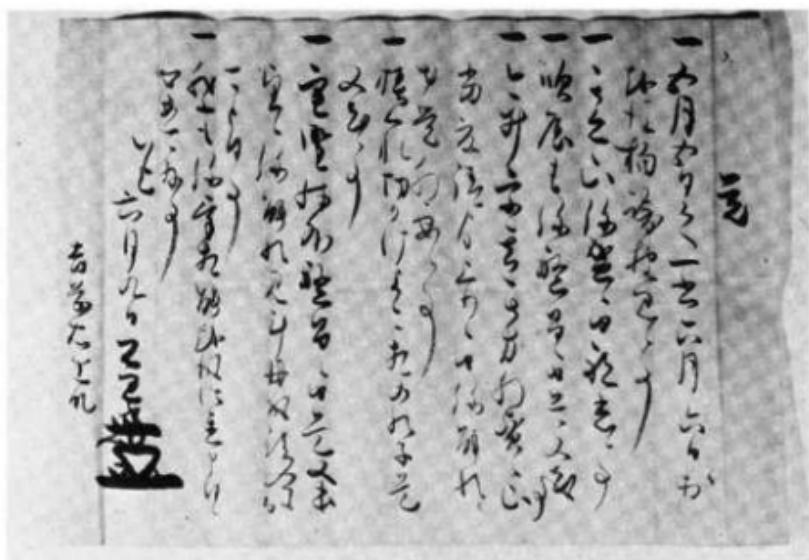
山中家文書「山中市兵衛他2名宛竹村丹後守書状」



山中家文書「中山平一郎由緒書」



安由家文書「藤井間之助由緒書」



吉岡家文書「大久保石見守長安書状」



吉岡家文書「大久保石見守長安書状」



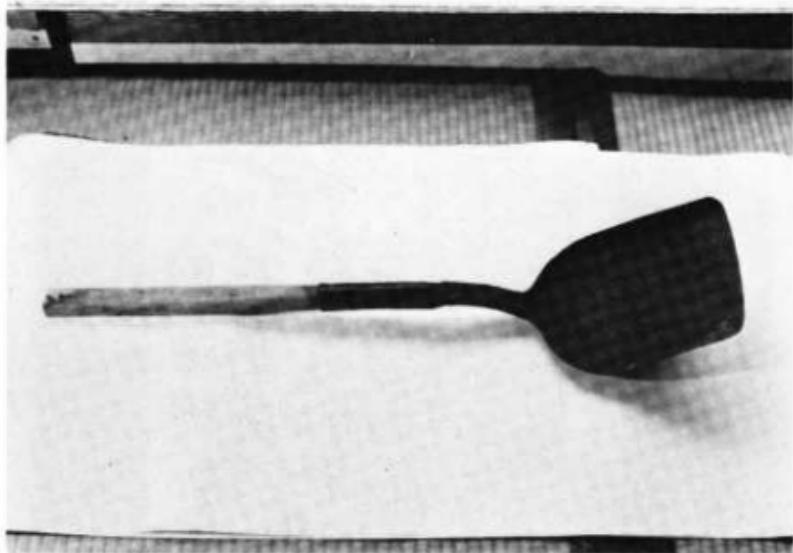
多田家文書「銀山井温泉津地錢免除二付高札」

(上) 多田家文書「諸国客船入津」

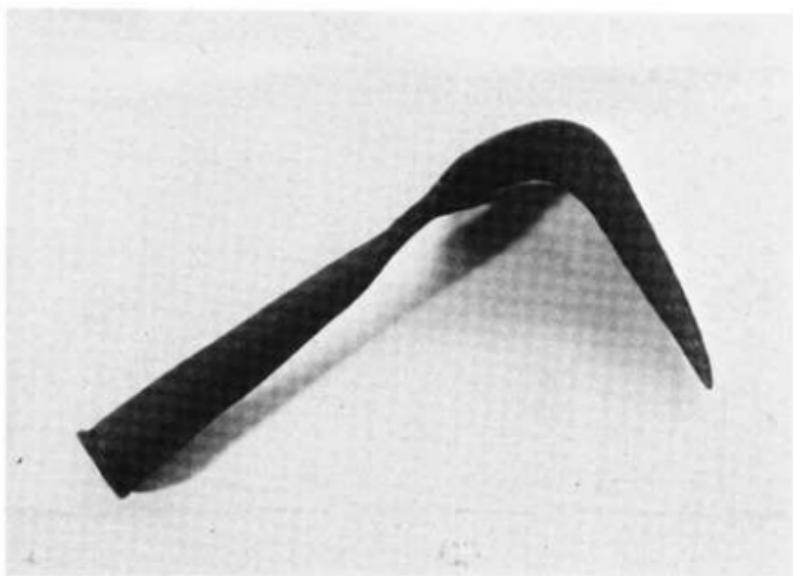


(下) 多田家文書「諸国客船入津」

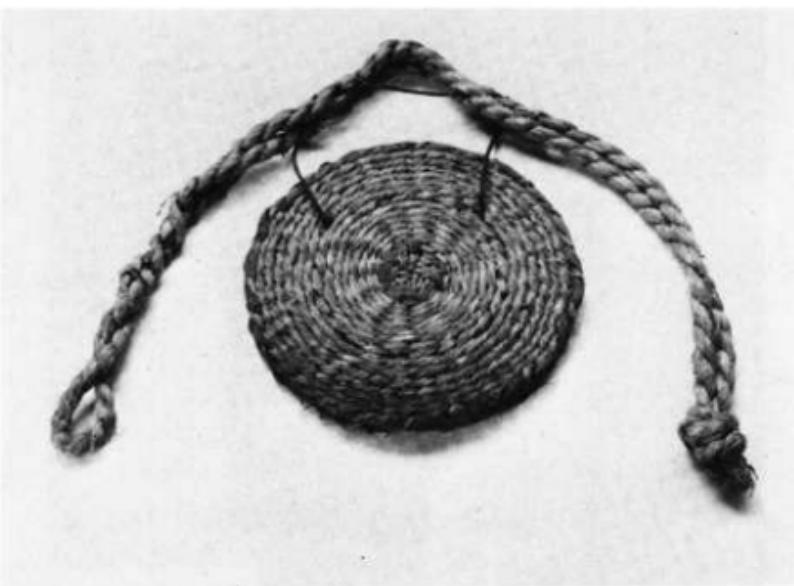




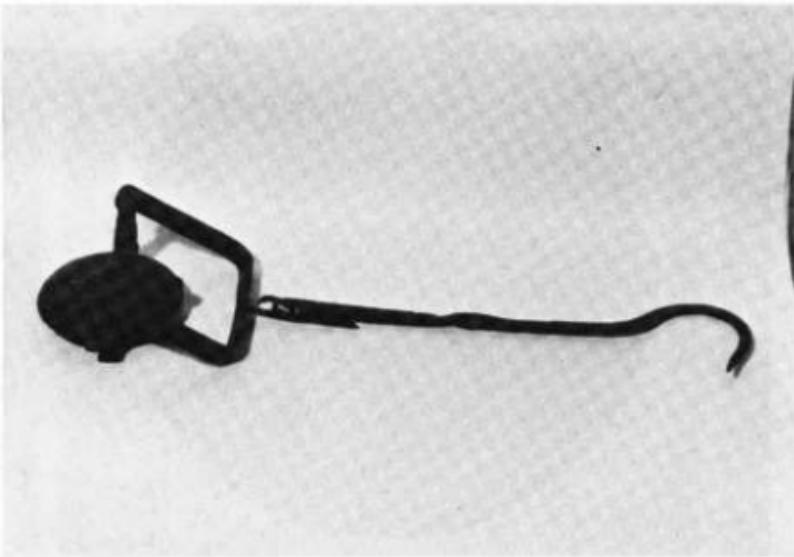
採掘工具「大しゃらげん」



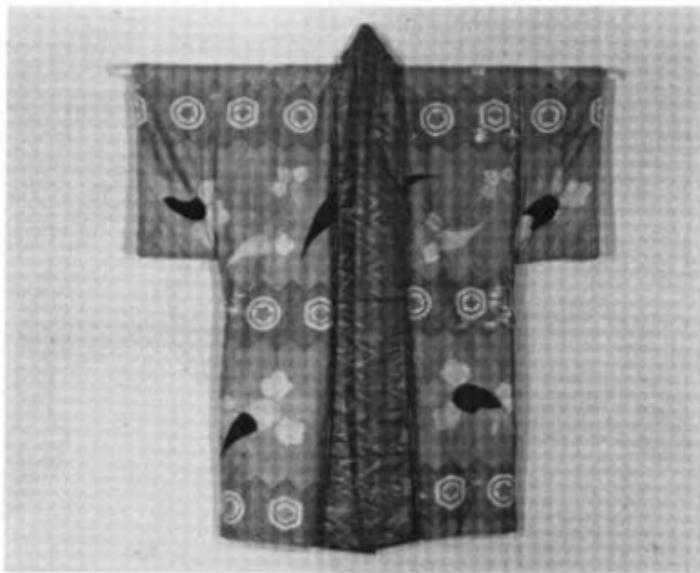
採掘工具「なまりこぎ」



探査用具「しきまつ」



探査用具「カンテラ」



辻が花染丁字文道服（重要文化財）



鏡 口（県指定）

(上) 絹本着色仏涅槃図  
(県指定) 部分

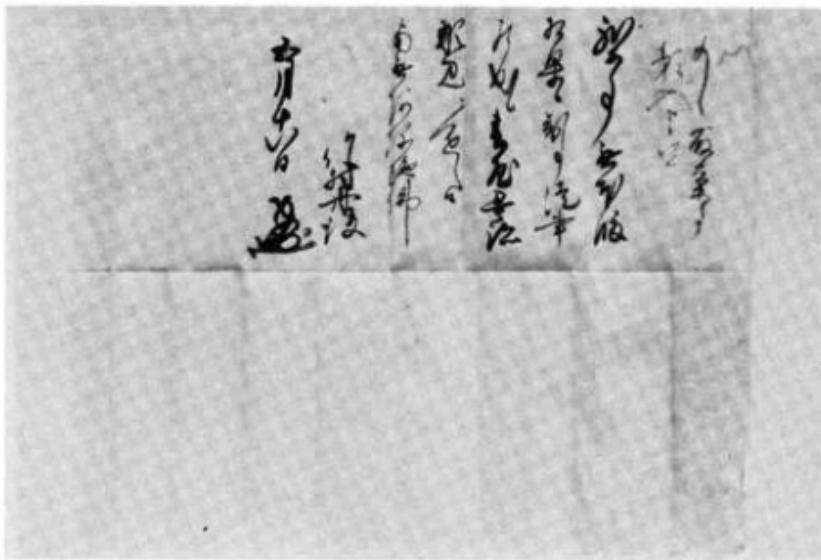


(下) 絵馬 (県指定)



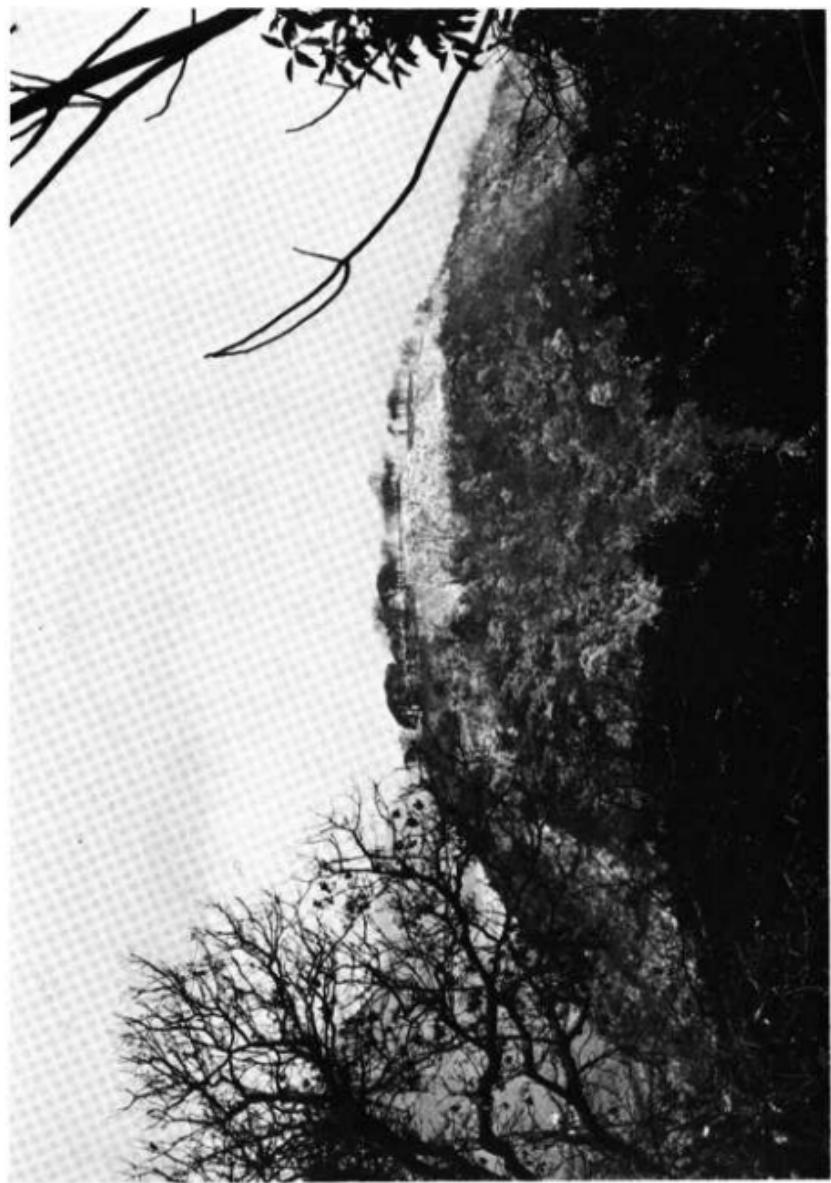


絵馬（県指定）



竹村丹後守書状

山吹城跡遺景（仙山から見る）

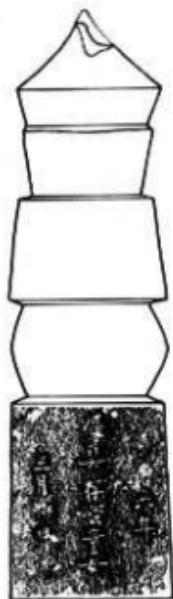


吉見銀山  
采金圖

此圖示吉見銀山之采金圖也。圖中之數字表示各處之深淺，其數字之大小，則又表示其開採程度之深淺。

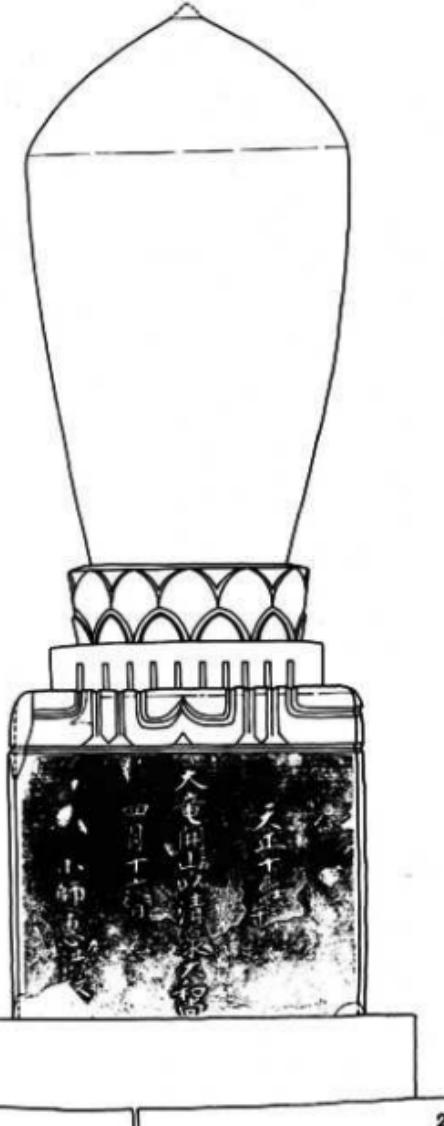


高橋家蔵「石見吉見銀山采金圖」



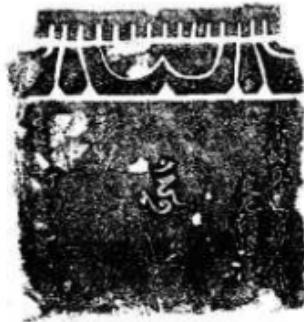
1

20cm  
10  
0

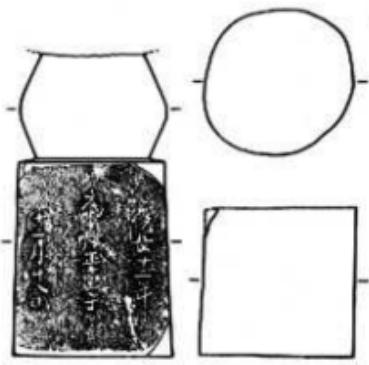


在銘石塔実測図(1)

1. 德善寺跡 2. 大龍寺跡



3



4



5

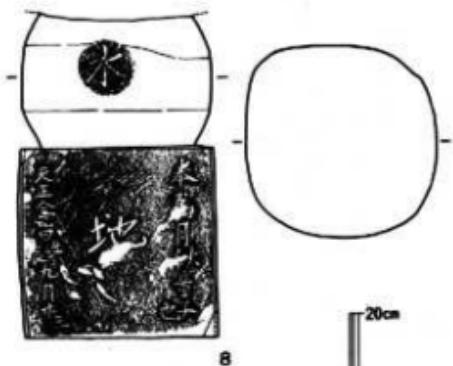


6



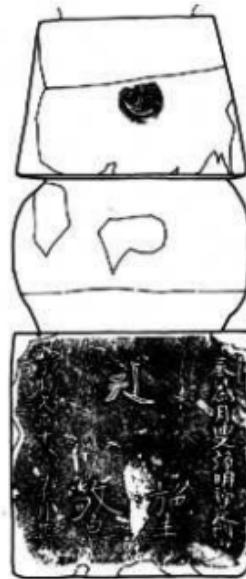
7

在詔石塔實測圖(2) 3. 5. 6. 龍昌寺跡、4. 德善寺跡、7. 妙像寺墓地

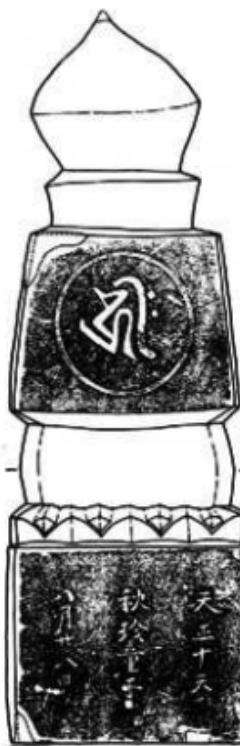


8

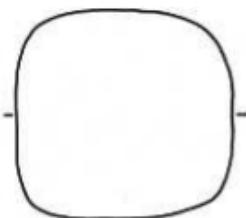
20cm  
10  
0



9



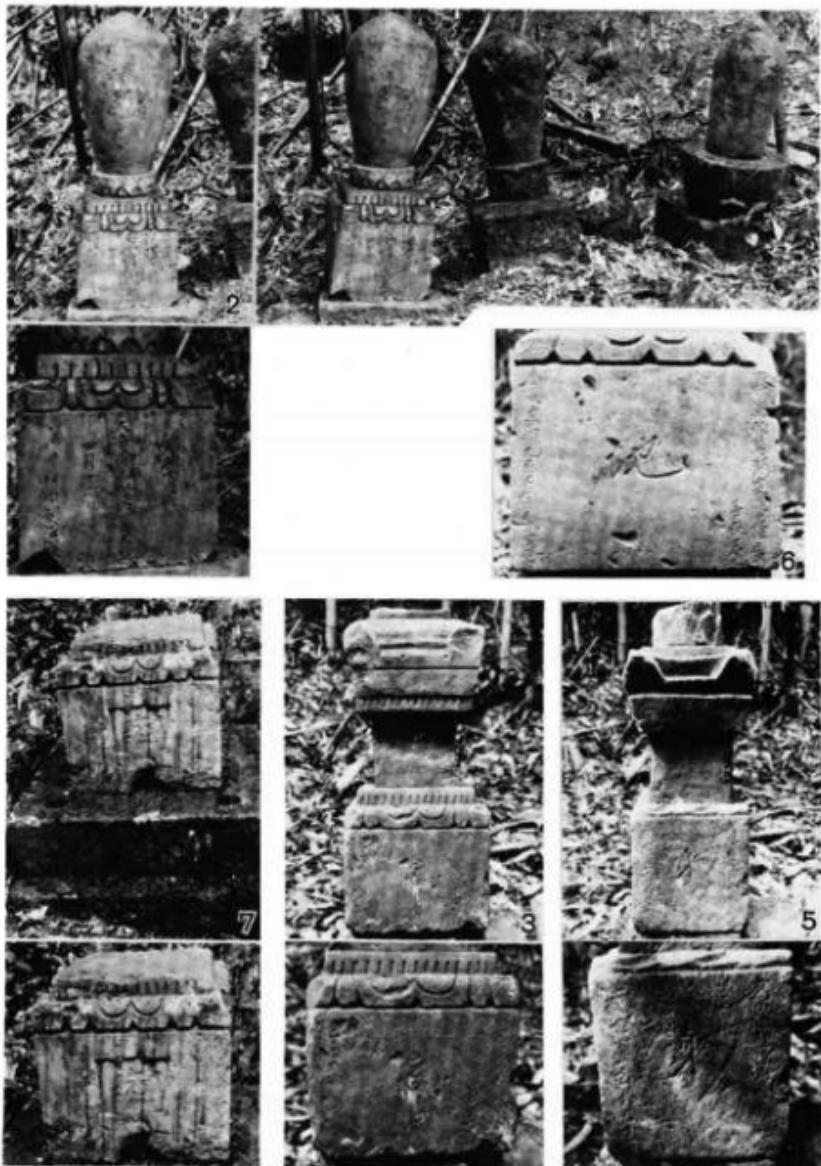
10



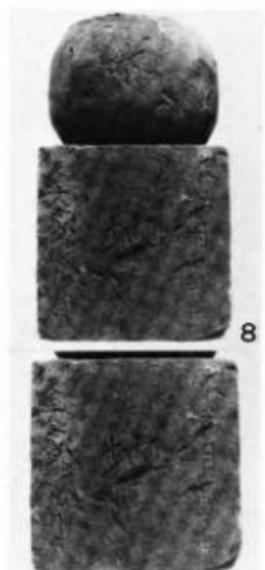
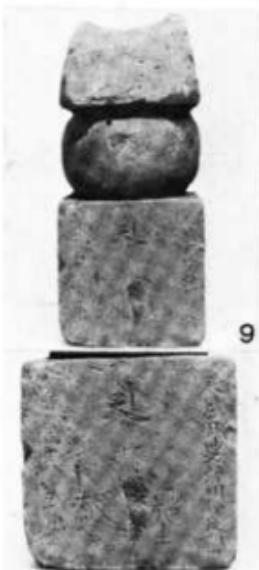
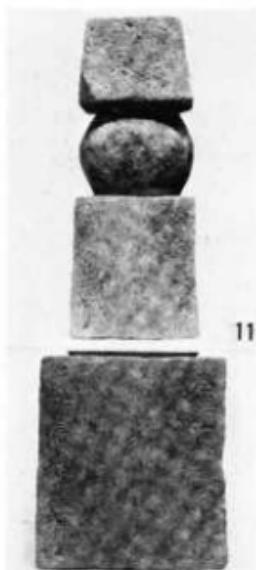
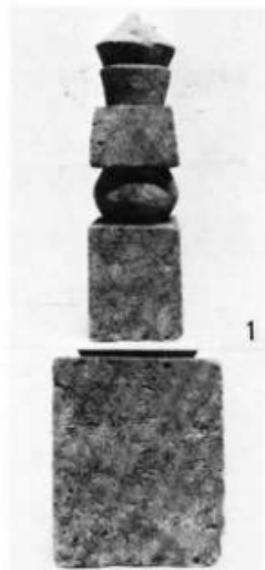
11

在銘石塔実測図(3)

8. 9. 11 龍昌寺跡、10. 德善寺跡



在鎌石塔(1) (番号は実測図の番号と同じ)



在銘石塔(2) (番号は実測図の番号と同じ)

石見銀山遺跡総合整備計画策定関連  
石見銀山開保資料  
関連遺跡分布調査報告

昭和六十一年三月三十一日

発行 松江市殿町一番地（県教育庁文化課内）  
島根県文化財愛護協会

印刷 平田市平田町九九三  
報光社